嫦娥はなぜ月へにげたか

――「奔月」にえがかれた魯迅の自画像――

吉田　恵

一

魯迅の廈門時代の産物の一つ――「奔月」は、全三章の、ごく短篇の小説である。そこには、中国の古代の神話のなかの、弓の名手の羿とその妻の嫦娥とが、おもだった人物として登場し、妻――嫦娥への、片恋い風のふかい愛情を中心にいきる主人公――羿の姿が、みごとに浮き彫りにされている。この作品は、筆者の考えによるかぎり、――といっても、いままでのところ、これを正面きってとりあげた人は、なさそうだが――なによりもまず、そのころ作者の心の奥にひそんでいた、ある切実な感情、つまり、広東にいた愛人の許広平への、おおきな不安をはらんだ、ひたむきな思いを、のべようとしたもののようにおもえる。

まず、そのあら筋を紹介しよう。

ことし四十六歳の羿には、嫦娥という、わかくてうつしい妻がある。ふたりは、おおぜいの家来や女中にかしずかれて、おおきな邸にすんでいる。暮らしをささえるものは、羿の弓だ。ところが、あたりの野原や森には、

もう、ろくな鳥も毛ものも、のこつていない。羿が、腕にまかせて、むちやくちやにとりすぎたからだ。で、このところ、獲物は、さつぱりおもわしくなく、まいにち、鴉の料理の連続である。嫦娥は、それが不満でならず、一年以上もまえから、夫にたいして、ぜんぜんすげない態度をとつている。おまけに、ちかごろは、夫にないしよで、近所の家へ麻雀をしにいつたりもするらしい。

羿は、きようも、とぼしい獲物を苦にしながら、狩りからかえつてくる。家にちかづくと、羿ののつている馬も、主人の気持ちをさとつてか、しよんぼりとしはじめる。なにしろ、きようの獲物は、鴉三羽に雀一羽というしまつなのだ。あんのじよう、嫦娥は、ご機嫌すこぶるななめである。おずおずと言い訳けをする夫の言葉には、てんで耳をかさず、「ふん」と、鼻の先であしらうばかりだ。そして、ひどいところへ嫁にきたものだ、と、ぶつぶついいながら、さつさとあちらへいつてしまう。羿は、妻の気分の、いくぶんやわらいだころをみはからつて、ふたりの結婚まえからの思い出を、たのしげにかたりかける。あの時分は、たいした獲物がとれたものだつけね。でかい猪だの、おおきな蛇だの、縞豹だの、駱駝だの、黒熊だの……。まつたく、わたしの弓はうますぎたのだよ。おかけで、すつかりとりつくしてしまつて……。でも、むかしは……。だが、嫦娥は、なかなかうちとけようとしない。かえつて、夫のいまの働きのなさを、ぽつんと、つめたくなじるばかりだ。羿は、妻のやつれた顔をながめながら、病気じやないかしらん、と気をもみ、そのまつかな唇・かあいいえくぼをみるにつけても、このような人に鴉ばかりたべさせるとは、と、つくづくはずかしくおもう。

翌る日の朝、夜は、もうすつかりあけたというのに、嫦娥は、まだねむりこけている。羿は、妻が目をさまさぬようにと、気をつかいながら、いつものように狩りにでかける。そして、きようこそは、という意気ごみで、はるか遠くまで馬をとばすのだが、めぼしい鳥や毛ものは、どこにもいない。それに気をくさらせているやさき、よその家の雞が、ふと目にとまる。羿は、それを野生の鳩とかんちがいして、いころしてしまう。だいじな雞を

ころされた、その家の婆あさんは、かんかんになつてくつてかかり、さんざん嫌やみをいい、そして弁償をせまる。押し問答のあげく、小麦粉の蒸し団子十個で、ということに話しがまとまる。

羿は、こうして一羽の雞を手にいれ、おもわぬ獲物に、ともかくも気をよくして、家路につく。と、いきなり、一本の矢が、羿をめざしてとんでくる。それは、逢蒙がはなつた矢だ。逢蒙というのは、ここなん年かというもの、羿の家にちよくちよく出入りする若ものなのだ。逢蒙は、羿をねらつて、つぎからつぎへと矢をはなつ。それを、羿の矢が、はつし、はつしと、空中でうけとめる。九本目で、羿の矢はつきる。十本目の矢が、羿の口にあたる。羿は、矢もろとも馬からおちる。羿はしんだ——逢蒙は、そうおもいこんで、とくとくとしてちかづいてくる。そして、羿の顔をのぞきこむ。そのせつな、羿は、がば、と身をおこす。羿は、とくいの「矢じりをかむ術」で、矢を口でうけとめたのだ。あてのはずれた逢蒙は、負け惜しみをいい、呪いの言葉をはきながら、たちさる。言二才のくせに、まつたく三におえぬ奴だ。そうおもうと、羿の心は、ふとくらくなる。

夕暮れの空に、星と月の光りがさわやかだ。羿は、家路をいそぐ。つまらぬことで、ひまどつたものだ。嫦娥は、わたしの帰りがおそいので、腹をたてているにちがいない。この雞で、機嫌をなおしてくれたらいいのだが……。そんなことをかんがえながら、家にかえつてみると、どうしたことか、嫦娥がいない。家来や女中は、あちらこちらとさがしまわつている。だが、嫦娥は、どこにもいない。わたしの帰りのおそいのをうらんで、もしや自殺でも……。羿は、そんな心配までする。ところが、じつは、嫦娥は、羿がさる道士からもらつた薬を、ぬすんでのみ、月の世界へにげてしまつたのだ。それは、のめばだれでも天へのぼれる、ふしぎな薬なのである。

薬のなくなつていることがわかると、羿はひどくおどろく。それは、たいへんだいじにしていた宝ものだからだ。だが、それよりもはるかに重大な事実にきづくとき、羿は、いいしれぬ寂びしさにおそわれる。うつくしい月をながめていると、とつぜん、はげしい怒りがわきあがる。羿は、怒りのあまり、月をいおとそうとする。む

嫦娥はなぜ月へにげたか

かし太陽をいおとした弓に、三本の矢をいちどにつがえ、月にむかつてたつ。そのおおしい姿は、まるで岩おのようだ。ほとんど同時に、三本の矢が、つるをはなれる。月は、ぐらつと、ひと揺れする。だが、それだけのことだ。あいかわらず空にかかつたまま、そしらぬ顔をしている。羿は、妻にすてられたことをかなしみ、じぶんの老いぼれぶり・働きのなさをなげき、嫦娥のにげたのもむりはない、とさえおもう。女中たちのみえすいたお世辞は、もちろん、羿をなぐさめるどころではない。

そうだ！　あの道士のところへいつて、もういちどあの薬をもらつてこよう。それをのんで、嫦娥のあとをおつていこう。ついに、羿は、こうかたく決心する。

この物語りの材料は、主として、「山海経[1]」・「楚辞[2]」・「淮南子[3]」とその高誘註[4]・「孟子[5]」・「列子[6]」などからでているようだ。

帝俊賜羿彤弓素矰、以扶下国、羿是始去恤下地之百艱。（「山海経」「海内経」）

天上の皇帝――俊は、下界をすくうため、羿に、朱塗りの弓と、白の生糸の射ぐるみの矢をたまわつた。これが、羿の、天からくだつて、地上のかずかずの災いをおさめたことの発端である。

十日代出、流金鑠石些。帝降夷羿、革孽夏民。羿焉彈日、烏焉解羽。（「楚辞」　「招魂」・「天問」）

十個の太陽が、かわるがわるあらわれ、金属と岩石をどろどろにとかした。天上の皇帝は、中国の人民をこの災いからすくうべく、大弓族の羿をあまくだらせた。羿のはなつた矢は、太陽（十おのうち九つ）のなかの鴉に命中し、その羽根は、ばらばらになつてとびちつた。

逮至堯之時、十日並出、焦禾稼、殺草木、而民無所食。猰貐・鑿齒・九嬰・大風・封豨・修蛇、皆為民害。堯乃使羿……上射十日而下殺猰貐……。万民皆喜、置堯為天子。（「淮南子」「本経訓」）

堯の時代になると、十個の太陽が、ずらりとならんであらわれ、穀物の穂をこがし、草や木をからした。こうして、人民は、たべるものがなくなった。そのうえ、猛獣・猛禽・大蛇・怪物のたぐいが、よってたかって人民をいためつけた。堯は、そこで、羿をつかわして、空にでた太陽（十おのうち九つ）をいおとさせ、また地上の悪ものどもをたいじさせた。すべての人民は、こぞってよろこび、堯をおしたてて天子にした。

羿請不死藥於西王母、姮娥（高誘註――姮娥、羿妻）竊以奔月。悵然有喪、無以続之。（「淮南子」「覽冥訓」）

羿が、西王母にねだって、不死の薬を手にいれたところ、姮娥つまり嫦娥（高誘の註によると、姮娥は羿の妻である）が、それをぬすんで、月へにげた。羿はひどくがっかりした。その薬は、じぶんでは、つくりようがなかったからである。

堯時羿善射、能一日落九烏……。（「淮南子」「俶真訓」高誘註）

堯のときの弓の名手――羿は、一日に九羽の（太陽のなかの）鴉をいおとしたほどの腕まえだった。

逢蒙学射於羿、尽羿之道、思天下惟羿為愈己、於是殺羿。（「孟子」「離婁」）

逢蒙は、羿に弓をならって、羿のわざをすっかりものにすると、こうかんがえた――世の中でじぶんよりうわ手なのは、羿ひとりだ、と。そこで、羿をころした。

嫦娥はなぜ月へにげたか

甘蠅、古之善射者。……弟子名飛衛、学射於甘蠅、而巧過其師。紀昌者、又学射於飛衛。……紀昌既尽衛之術、計天下之敵己者一人而已。乃謀殺飛衛。相遇於野。二人交射、中路矢鋒相触而墜於地、而塵不揚。飛衛之矢先窮、紀昌遺一矢、既発、飛衛以棘刺之端扞之而無差焉。於是、二子泣而投弓、相拝於塗、請為父子、尅臂以誓、不得告術於人。（「列子」「湯問」）

むかし、甘蠅という弓の名人がいた。飛衛というものが、弟子入りして、弓をならつたところ、師匠そこのけの腕まえになつた。その飛衛に、紀昌というものが、また弓をならつた。紀昌は、衛のわざをすつかりものにしてしまうと、世の中でじぶんの向うをはれるものは、ひとりしかいないわけだ、とかんがえた。そこで、飛衛をころそうとたくらんだ。ふたりは、あるとき、野原でひよつこりとであつた。おたがいがつぎつぎとはなつ矢は、空中できつ先どうしふれあつては、地面におちる。が、地面からは、砂ぼこりひとつたたぬ。飛衛の矢が、さきにつきた。紀昌は、のこつた一本の矢をはなつた。それを、飛衛は、いばらのとげの先で、ぴたり、とうけとめた。そこで、ふたりは、涙をながしながら、弓をなげだし、道ばたで頭をさげあつて、親子の契りをかわし、肘をきつてだした血にかけて、じぶんたちのわざを、ひとにもらさぬ誓いをたてた。

魯迅は、これら、おおくの古典からひろいあつた神話や伝説をもとにして、一篇の「奔月」をかきあげたのである。しかも、もとの材料には、まつたくしばられず、かえつて、それらをたくみにいかし、あるいは、思いのままに料理しているようだ。たとえば、羿は、「山海経」・「楚辞」・「淮南子」では、なによりもまず、天変地異をたいらげて人民をすくう神ないしは英雄である。ところが、「奔月」は、嫦娥の夫としての羿を正面におしだしている。ここでは、太陽や猛獣をいる現場は、でてこないし、また、人民をすくう、というてんは、きりすてられている。嫦娥の家出は、「淮南

子」の羿にとつては、たんに薬の紛失をいみするにすぎぬらしいのにひきかえ、「奔月」の主人公にとつては、それどころのさわぎじやない。嫦娥のおかんむりの種の鴉料理にされる鴉は、羿のいおとした太陽からぬけだしてきたものにちがいない。羿と逢蒙との勝負の場面は、「孟子」の記事と「列子」のとを、うまくかさねあわせたもののようだ。――ついでにいえば、羿は、「山海経」や「楚辞」によると、天からおりてくるのだが、「淮南子」になると、はじめから下界にいるようにみえる。ここには、神から英雄へ、という神話の歴史の一般法則が、みとめられそうだ。十おの太陽が九つまでいおとされた、というのは、太陽はなぜひとつしかないのか、という疑問への答えをふくんでいるらしい。太陽のなかの鴉は、太陽黒点を説明したものだろう。「嫦娥」という言葉の意味は、「いつもうつくしい」ということだ、とかんがえられる。「嫦」という文字は、「姮」の俗体で、もとは、同音・同義だつたようだが、いまでは、発音も、ふつうはちがう。なお、羿と雞と婆あさんのくだりは、古典をふまえたものではなさそうだ。

魯迅は、かつて、「中国小説史略」[7]の第二篇「神話与伝説」で、中国の古代いらいの神話と伝説をとりあげ、その起源と発展について、かなりたちいつた説明をこころみ、神話伝説研究へのふかい関心をしめした。いま、この「奔月」をかくにあたつてつかつた神話や伝説は、たいてい、そのような関心のもとにあつめてあつたものだろう。ところが、ここでは、神話・伝説そのものの意味をさぐろうとする意欲は、すつかり影をひそめているようだ。作者は、神話や伝説を、たんなる素材としてつかいこなしながら、それらとはまつたく係わりのない、なにか、じぶんの心のなかにあるものを、はきだそうとしているらしいのである。

いつたい、魯迅の、中国の神話や伝説や歴史を種にした作品は、すべて、このような行き方をとつているようにおもえる。もちろん、作品によつて、主題の種類はさまざまである。「故事新編」[8]は、それらの作品をひとまとめにしたもので、「奔月」もそのなかにおさまつている。この「故事新編」（あたらしくあんだ昔物語り、新版昔物語り）という表題そのもの、また、その自序のなかの「いまやつと、どうやら一冊の本にまとめあげたわけだ。とはいうものの、やは

り、その多くは、素描であつて、『文学概論』にいうところの小説の名には、あたいしない。かいてあることは、ちよつと昔の本にもとづいたところもあるが、ただのでまかせのお喋りもある。それに、じぶんは、昔の人にたいして、今の人にたいしてほど、敬意をはらつていないので、いきおい冗談まじりになりかねなかつた」という、魯迅一流のひと捻りした文句は、作者が、そのような行き方をはつきりと意識していたことを、つげるものではなかろうか。

つぎに、「故事新編」の目録を、かんたんな註釈つきでかかげておこう。地名は、制作の場所を、かつこ内は、おもな登場人物ならびにジャンルをしめす。

「序言」	一九三五年十二月二十六日	五十五歳	上海
「補天」	一九二二年十一月作	四十二歳	北京（女媧　小説）
「奔月」	一九二六年十二月作	四十六歳	廈門（羿・嫦娥　小説）
「理水」	一九三五年十一月作	五十五歳	上海（禹　小説）
「采薇」	一九三五年十二月作	五十五歳	上海（伯夷・叔斉　小説）
「鑄剣」	一九二六年十月作	四十六歳	廈門（眉間尺　小説）
「出関」	一九三五年十二月作	五十五歳	上海（老子・孔子　小説）
「非攻」	一九三四年八月作	五十四歳	上海（墨子　小説）
「起死」	一九三五年十二月作	五十五歳	上海（荘子　戯曲）

註1　戦国時代（前四〇三～二二一）の書物、巫（シャーマンの一種）の口伝えしていた神話を、かきとどめたものとかんがえられる。

2　戦国時代の楚の国の貴族出身の大詩人――屈原（前三四三～二七八）の作品を中心とする詩集。ここにひいた『天問』は、屈原の、「招魂」は、その弟子の宋玉のかいたもの。

3　前漢王朝（前二〇六～後八）の淮南王――劉安（？～前一二二）編ならびに著、老荘流の思想をのべた書物。

4　前漢王朝の古典注釈家――高誘のつくつた「淮南子」の注釈。

5　戦国時代の魯の国生まれの、孔子学派の大立て物――孟子（前三九〇～三〇三）の思想の記録、本人のあらわしたものとつたえられている。

6　戦国時代の老荘学派の書物、後世にかかれた部分をふくんでいる。列子という人物の実在性は、あまりたしかでない。

7　著者の、北京大学での講義のノートに手をいれたもの。上巻（第一編～第十五編）は、一九二三年十二月、新潮社出版。下巻（第十六編～第二十八編）は、二四年六月、同社出版。上・下巻合訂本は、二五年九月、北新書局出版。

8　一九三六年一月、文化生活出版社から「文学叢刊」の一冊として出版。

二

さて、魯迅は、なにをいいたくて、「奔月」をかいたのか。ここでは、「昔の本にもとづいた」、どんな「でまかせのお喋り」をするつもりだつたのか。それは、つぎのようにかんがえられる――「奔月」の主人公の羿は、当時の魯迅そのひとの、ひとつの自画像であり、化身である。羿の生活の中心をなす、嫦娥への愛情は、とりもなおさず、魯迅の、許広平にたいする愛情の、いつわらぬ姿であろう。その愛情のなかにやどる不安の念が、嫦娥の態度と行動には、投影されているようだ、と。

廈門時代の魯迅と「奔月」の羿とは、つぎのような、いくつかのおおきなてんで、ぴつたりと符合する。四十六歳の、かがやかしい過去をもつた男が、現在は、不振をかこつている。かれは、思い出にふけりがちである。その身のまわりには、不愉快な出来事がおこる。生活のなかできわめて重要な位置をしめるものとして、ひとりの女への愛がある。

魯迅は、廈門にいたころ、数えで四十六歳（以下、年齢はみな数え年である）、ちようど羿と同い年だつた。羿は、

嫦娥はなぜ月へにげたか

雞をいるくだりで、婆あさんの問いにこたえて、「我去年就有四十五歳了」（わたしは、去年四十五歳になつたところです）という。「ことし四十六歳」といわせないのは、れいの捻りであろう。

魔門時代にさきだつものとしては、北京での黄金時代があつた。まる五年にちかい、日本への留学をおえて、一九〇九年、母国にもどつた魯迅は、一時、ふる里の紹興で紹興師範学校長をつとめたのち、一二年一月、同月一日に南京に誕生したばかりの、中華民国政府の教育部（わが国の文部省にあたる）にはいり、その年の五月、政府の移転にともなつて、北京にうつつた。それいらい一九二六年八月までの、年齢でいえば、三十二歳から四十六歳までの、あしかけ十五年が北京時代である。魯迅は、そのあいだ、教育部の僉事（わりあいに仕事のひまな、中くらいの地位だつたらしい）をつづけ、一九二〇年いご、北京大学その他の学校の講師をかねるいつぽう、一八年ころからは、当時北京を中心にうしおのようにうずまいていた、反封建を共通の旗印とする新興文化運動の花形のひとりとして、めざましい活躍ぶりをみせた。中国近代文学の口火をきつた「狂人日記」[1]や、代表作にあげられる「阿Q正伝」[2]その他の、おおくのすぐれた小説をつくり、中国小説史研究の分野にあたらしい道をきりひらいた「中国小説史略」をかき、独自の関心のもとに、外国文学の翻訳・紹介に力をそそぎ、新聞・雑誌に、機智にあふれた、するどい文明批評の筆をふるうなど、みなこの時期にやつたことだ。魯迅は、まさしく、九つの太陽をいおとし、みごとな動物をたくさんしとめたのである。

一九二六年八月二十六日、魯迅は、すみなれた北京をはなれ、みしらぬ廈門へむかつた。――そのころ、魯迅の母国は、おおきな悩みのなかで身悶えしていた。この国の市場をねらう列強の手は、大陸のうえに、黒雲のようにおおいかぶさり、かれらとむすびついて「共和国」の実権をにぎる、国内のふるい力は、それにいどむあたらしい力と、はげしくぶつかりあい、いたるところ、血なまぐさい風がふきすさんでいた。当時まで十なん年かにわたる中国歴史年表を、ひと目みるだけで、このような情勢は、手にとるようにわかる。……一九一一年の辛亥革命（市民革命の中国版とかんがえられるもの）、一二年の中華民国の成立（政府――北京におかれた――の実権は、封建軍閥の手へ）、一五年の日本によ

る二十一個条の要求、一九年の五・四運動（北京での反帝学生運動）、二一年の広東政府の成立（中国国民党によるもの、急進民族資本を代表）、同年の中国共産党の結成、二二年の香港海員ストライキ、二三年の京漢鉄道ストライキ、二四年の国民党の改組と第一次国・共提携、二五年の中華全国総工会の結成（「工会」は「労組」のこと）、同年の五・三〇事件（上海租界で、英人巡査、スト弾圧に反対する学生デモ隊に発砲）とそれにたいする全国的抗議ストと集会（上海・北京・漢口・広東・香港などで、労働者・学生・商人ら参加）、二六年の三・一八事件（北京での、反帝学生デモの弾圧）、同年の北伐の開始（七月、国・共提携のうえにたつ広東国民政府、北京政府を代表とする軍閥勢力にたいして、国民革命軍を出動）、二七年の国・共分裂と南京国民政府の成立（国民党によるもの、大地主・大資本家を代表）……一九二六年三月十八日に北京でおこつた三・一八事件では、列強にたいする、政府の弱腰をせめるためにおしよせた、学生を中心とする、わかい男女数千の「暴徒」にむかつて、政府の守衛が銃火をあびせ、四十七人をころし、三百人あまりをきずつけた。魯迅は、この事件をまえにして、はげしくいきどおり、ふかくなげき、この日を「三民国いらいのもつともくらい日」[3]とよんだ。三・一八事件ののちまもなく、北京政府は、北京文化界のロやかましい連中を、「国事犯」としてとらえる動きをみせた。魯迅は、この危険をのがれるため、北京をはなれ、おなじように危険をさけて、郷里の厦門大学文科学長の地位にあつた林語堂（一八九五～）の招きで、同大学の教授となるべく、厦門へむかつたのである。ついでにいうと、ちようどこのころ、変転自在の熱血漢――郭沫若（一八九一～）は、国民革命軍政治宣伝科長として、北伐の陣中にあつた。

厦門での生活は、一九二六年九月四日からあくる二七年一月十五日までつづいた。魯迅は、ここで、はなはだしい沈滞にみまわれ、そのため、ふかくなやんだ。魯迅じしんの言葉によれば――「ここにきてからというもの、わたしの心は、まつたくうつろのような感じで、もはや、どんな考えもうかばない。そのうえ、たしかに、えたいのしれぬ悲しみをあじわうことがある。[4]」・「仕事はといえば、わたしは一生懸命になれない。わたしは、じつさい、以前からみると、ず

つとものぐさだ。いつも、ぶらぶらあそんでいて、なにもしない。[5]」・「わたしは、……いつも、『語糸』[6]に投稿したいとおもつている。だが、ひとこともかけない。……いまは、ただ講義のノートをつくつているだけだ。[7]」・「わたしは、講義と創作とは、けつして両立しえないものだ、という気がする。……わたしは、将来の行き方として、研究しながら講義をやるか、それともルンペンしながら創作をやるか、どちらかをえらばねばならぬ。もし、両方に手をだせば、あぶはちとらずになるだろう。[8]」――このような状態は、北京での、なまなましい現実ととりくんだ、さかんな活動の結果としての疲れや、三・一八事件からうけた、つよい打撃がかさなりあつて、うまれたものとかんがえられる。そのきつかけは、北京から廈門へ、という環境のたいへんな変化にあつたにちがいない。すみなれた首都から、みしらぬ田舎町へ、北と南との、風土・言語・習慣・人情のおおきな隔たり……。かつての「阿Q正伝」の作者・「中国小説史略」の著者は、いまや、講義のノートをこしらえるのがせいいつぱいで、講義と創作とは両立しない、となげく。廈門大学文科国学系での、中国小説史・中国文学史おのおの週二時間という受け持ちの講義のうち、中国文学史のほうは、ノートを用意する必要があつたのだ。[9]しかも、この講義のノートすら、まんぞくなものはできなかつたらしい。ちやんとした中国文学史をかきあげたい、というのは、魯迅が、しぬまでいだきつづけながらも、ついにとげかねた野心だつたのである。鴉しかとれない羿の悩みはふかい。――もつとも、「うしろには山、まえには海、こよなき桃園[10]」の、廈門という「この土地」は、魯迅の「体にとつては、いいようだ」つた。「その証拠に、よくたべ、よくねむる。ひよつとすると、すこしふとつたかもしれない。[11]」

魯迅の「うつろ」な心のなかには、おのずから、思い出が頭をもたげた。ざつと九年ののち、魯迅はこうのべている――「一九二六年の秋、ひとりで廈門の石づくりの家にすみ、大海原にむかいながら、昔の本をひつくりかえしていた。あたりには、人の気配はなく、心のなかは、がらんどうそのものだつた。ところが、北京の未名社[12]は、ひつきりなしに手紙をよこし、雑誌の原稿をさいそくしてきた。このとき、わたしは、目の前のことに思いをよせたくなかつた。そこで、

思い出が、心のなかに芽をふき、十篇の『朝華夕拾』[13]をかきあげた。それにまた、(『嵐天』に)ひきつづき、古代の伝説のたぐいをひろいあつめて、八篇の『故事新編』をしあげる準備をした。もつとも、『奔月』と『鑄剣』――発表したときの題目は『眉間尺』――をかいたきり、わたしは広州へにげたので、このことは、またもや、そのまま棚上げになつてしまつた。[14]――「朝華夕拾」は、幼年時代から日本留学時代までについての、思い出の記をまとめたものである。全十篇のうち、廈門での作は五篇だけで、残りは、おなじ年、廈門にくるまでにかいたものだ。それらの文章には、かつて作者の身近かにあつた人・物・事にまつわる、なつかしい思い出のかずかずが、抒情味ゆたかな筆でしるされている。思い出をなつかしむ気持ちと、「古代の伝説のたぐい」にしたしむ気持ちとには、あいつうずるものがあるようだ。なるほど、「鑄剣」や「奔月」は、当時の作者の心の思いをあらわしたものかもしれぬ。とはいえ、魯迅は、これらの作品を、「昔物語り」という形でしかかこうとしなかつたのだ。「朝華夕拾」の五篇と「故事新編」の二篇、つごう七篇の、廈門での作品は、それぞれにすぐれている。「目の前」つまり現在の問題にたちむかつては無力な、「うつろ」な心は、しかし、過去の思い出や「昔物語り」に身をしずめるときには、生気をとりもどすのだつた。思い出をかたれば、羿の心ははずむ――あの時分は、たいした獲物がとれたものだつけ。でかい猪だの、おおきな蛇だの、縞豹だの、駱駝だの、黒熊だの……。

そのころ、魯迅の身のまわりには、たまたま、二つの、おもしろくない事件がおこつた。一つは、いわゆる高長虹事件で、もう一つは、顧頡剛らによる魯迅排斥運動だつた。高長虹事件というのは、高長虹という青年が、上海で「狂飆」という雑誌をだし、廈門にいた魯迅にたいして、いやがらせ的攻撃をしかけてきた事件で、その攻撃ぶりは、なかなかあくどいものだつたらしい。[15]その狙いは、相い手の名声を逆用しての売名にあつた、とかんがえられる。そこには、もちろん、その名声への妬みもはたらいていたことだろう。ともあれ、魯迅は、この、高長虹の攻撃には、よほど腹をすえかねたようだ。[16]「奔月」の、羿と逢蒙との勝負のくだりは、作者の、高長虹への怒りをぶちまけたもののようにおもえる。羿をいころしたつもりでちかよつてきた逢蒙にむかつて、羿は、「你真是白来了一百多回。難道這我的『嚼鏃

術』都没有知道麼？這怎麼行。你鬧這些小玩芸児是不行的……」（おまえが百回きたつてむだだ。まさか、わしの「矢じりをかむ術」をしらなかつたはずはあるまい。そんなことでどうする。こんないたずらはよせ）としかりつけるのである。魯迅じしんの、つぎのような言葉は、そのことをうらがきするものだろう。――「長虹が、わたしに、むきになつてくつてかかつてきた。……そのとき、わたしは、一篇の小説をかいて、かれをすこしばかりからかつてやつた。」[17]――顧頡剛（一八九三～）は、廈門大学での同僚のひとりだつた。かれを頭目とする一味八人のものは、魯迅を、「名士派」（おぼつちやん、旦那衆、というような意味をふくむ）とよんで排斥した。[18] このことは、魯迅の気持ちをかなりきずつけたらしい。魯迅は、九年ばかりものちの作品――「理水」（「故事新編」のうち）のなかでさえ、顧頡剛へのあてこすりをやつている。「奔月」のなかの、羿に雞をころされて、嫌やみをならべたてる婆あさんは、顧頡剛の漫画なのかもしれない。羿が、雞の弁償の額をめぐつて、婆あさんとねばりづよくかけあうところには、排斥に屈しまいとする魯迅の気持ちが、でているのではなかろうか。もつとも、顧頡剛そのひとは、中国に近代的な文献批判学の金字塔をうちたてた、りつぱな学者である。その学風は、わが国の津田左右吉翁のそれにて、ねづよい反儒教魂にささえられている。林語堂にたいしては、魯迅は、どちらかといえば、好意と信頼の念をいだいていたようだ。廈門大学に世話してもらつた恩義もさることながら、このふたりの人物のあいだには、もともと、馬のあうところがあつたのだろう。才気にとんだジャーナリスト――林語堂は、同時に、海外にあつても、つねに母国への郷愁をうしなわぬ詩人なのだ。――魯迅が、廈門のバナナは、北京のよりうまい。だが、値だんはそうとうなものだ。バナナをうつている、ちいさな店にいくと、そこのふとつた婆あさんが、べらぼうな値でうりつける。わたしをよそものとみてばかにしているのか、それとも、もともとこんなにたかいのか、という意味のことを、さも不興げにのべている[19]ところをみると、「奔月」の婆あさんは、じつは、このバナナ売りの婆あさんではないか、という疑いが頭をもたげる。そうなると、顧先生には、残念ながら、ひきさがつていただかねばなるまい。もつとも、この場合、モデルをひとりときめてかかる必要は、ない

かもしれない。いずれにせよ、婆あさんとの場面は、羿と魯迅との一致をうらぎるものではない。

このような、廈門での生活のなかで、魯迅にとつてのなによりの楽しみは、広東にいた愛人の許広平との、手紙のやりとりだつた、とかんがえられる。北京時代の、さいごから二番目の年、つまり一九二五年、北京女子師範大学での教え子のひとり――許広平（一九歳だつたとも、二十七歳だつたともいわれる）からの、三月十一日づけの、いわばファンレターがまいこんだことにはじまる、文通を中心とするふたりの交りは、師弟愛から友情へと、だんだん親しみをましていつた。そのころの、ふたりの手紙の話題は、だいたい、文学や人生や社会に関するものにかぎられていた。とはいえ、そこに、ふかい親しみの感情のあふれていることは、おおえない。魯迅は、北京脱出のさい、上海まで許広平といつしよだつた。許広平は、生まれ故郷の広東女子師範学校の教授の職につくため、上海で魯迅とわかれて、広東へむかつた。許広平の、広東での生活も、あまりおもしろいものではなかつたようだ。学校では、訓育主任という、とびきりいそがしい役目をおおせつかつたうえ、[20]その役目から、学生のあいだの旧派と新派との争いのとばつちりをうけたりした。[21]また、校長の兄が国民党左派だということだけで、「赤」呼ばわりされることもあつた。[22]廈門の魯迅と広東の許広平とは、ひまさえあれば手紙をとりかわし、おたがいの悩みや不平をうつたえあつた。このとき、かつての友情は、すでに、愛情にまでそだつていた。My Dear Teacher とよびかける許広平にむかつて、魯迅は、じぶんの沈滞ぶりをさえ、すつかりうちあけた。それらの手紙には、世の常の恋い文のような、あからさまな愛の言葉は、みられないにせよ、その文句のはしばしは、そこにふかい愛情の交流のあつたことを、はつきりとかんじさせる。羿にとつては、嫦娥への愛こそ、全てである。当時の魯迅にとつても、許広平にたいする愛情は、それにちかかつたのではなかろうか。すくなくとも、魯迅の生活のなかで、許広平への愛情が、たいへんな重みをもつていたことだけは、まちがいない。嫦娥の年齢は、「奔月」では、じつは、はつきりとはしていない。けれども、月の精ともあらうものは、つねにわかくうつくしくあらねばならぬ。「淮南子」の高誘の註によると、嫦娥は、月へにげてから、月の精になるのである。

このように、廈門時代の魯迅と、「奔月」の羿とは、ちいさなずれはともかくとして、いくつかのおおきなてんで、ぴつたりと符合する。羿は、当時の魯迅の、ひとつの変化の姿である、ということは、もはや、ほとんどあらそえない。この羿の、嫦娥への愛情こそ、そのころ魯迅の胸の底にひめられていた、許広平にたいする愛情の、真実の姿ではあるまいか。羿の、嫦娥への愛情を特徴づけるてんは、すくなくとも三つある。それは、まず、じつにふかい。つぎに、思いやりにあふれている。そして、まつたく無私である。「奔月」の全体にわたつてかんじられる、羿の愛情の深さは、そのさいごのくだりで、ひときわあらわになる。にげた嫦娥をどこまでもおいかけようとする、その決心の、異常なまでの強さは、その愛情の深さをはからせる。嫦娥をうばつた（?）月へのはげしい怒りも、その深さのほどをものがたるものだ。羿の思いやりぶりも、いたるところにしめされている。羿は、嫦娥の顔色のすぐれないのをみては、病気ではないか、と気をもみ、じぶんの帰りがおそくなれば、嫦娥がふぐれているだろう、とおもい、嫦娥がいなくなれば、もしや自殺でも、と心配する。いつも、相い手の身になつてやり、労わりと憐れみの気持ちをそそぐ。ここでは、羿は、まるで、いたいけないわが娘をかばう、こぼんのうな父親のようだ。また、羿は、ひたすら嫦娥のために、まめまめしくはたらく。しかも、嫦娥にどれほどすげなくあしらわれても、そのあげく家出をされてさえ、じぶんをせめこそすれ、いつこうに相い手をうらもうとはしない。文字どおり、無私の愛である。それは、なにか、道徳的なけだかさをかんじさせる。当時、魯迅は、許広平にたいして、このような、思いやりにあふれた、まつたく無私な、じつにふかい愛情をいだいていた、とかんがえられる。それは、魯迅独特の、愛情の在り方が、もつとも純粋な形であらわれたものだろう。

ところで、そのころ、魯迅は、許広平にたいして、このような愛情をいだく反面、一種の不安をかんじていたらしい。ひと口でいうと、許広平をうしないはしまいか、という不安である。嫦娥の、羿にたいする態度と行動には、そのような不安がうかがえるのだ。鴉の料理の連続が気にいらぬ嫦娥は、羿がどれほど言い訳けしても、また、たのしい思

い出ばなしをもちだしてみても、ただ、「哼」(ふん)と、鼻の先であしらうだけ、というつれなさ。あげくのはてには、羿をすてて、月の世界へにげてしまう。魯迅の愛情がふかければ、ふかいだけ、そのなかにやどる不安の念は、おおきかったにちがいない。そのおおきな不安が、嫦娥の、このまったくつめたい態度・行動として、あらわれたようにおもえる。魯迅の、この不安は、なにはさておき、仕事の不振からくる引け目が、もたらしたもののようだ。嫦娥の不満の、第一の原因は、羿の獲物のおもわしくないことにあり、羿も、そのことで、気をくさらせ、言い訳につとめるのである。そこには、また、四十六歳の男と二十歳(あるいは二十八歳)の娘という、年齢のおおきな開きにともなう僻みも、はたらいていたらしい。嫦娥が月へにげたあと、羿は、「她竟忍心撇了我独自飛昇? 莫非看得我老起来了?」(とうとう、すげなくわたしをすてて、ひとりで天へのぼったのか? わたしがおいぼれたと、おもったのではなかろうか?)となげくのである。許広平は、その年、つまり一九二六年の、十二月にはいってから、勤め先の広東女子師範学校が、赤字経営のせいで、休校の羽目におちいったため、おなじ広東にあった、じぶんの里の家にかえった。[23] おそらくは、この出来事も、魯迅の心に微妙な影響をおよぼしたことだろう。ひょっとすると、むしろ、この出来事こそ、魯迅の不安の、いちばんおおきな原因だったのかもしれない。すくなくとも、嫦娥の、月へにげるという行動は、おおかれすくなかれ、許広平の身のうえにおこった、この変化を反射しているような気がする。もっとも、里の家にかえってからの、許広平の、魯迅への手紙には、べつだん、かわった調子はみとめられないようだ。羿が、月をいおとそうとし、さらに、どこまでも嫦娥をおっていこうとする、大詰めの場面は、魯迅の、この不安とたたかい、それをのりこえて、そのかなたに、その愛情をまっとうしようとした、つよい意志を、しめしたものとかんがえられる。そこには、魯迅の心の動きの、根本的な型、つまり、肯定的なものが、否定的なものをはらみ、それともみあい、それをねじふせて、おのれをまえへおしすすめるという、いわば弁証法式の動き方がみられる。

魯迅は、じじつ、許広平を妻にした。あくる一九二七年一月十五日、魯迅は、廈門をひきあげて、広東へむかった。

広東では、中山大学文学系の主任兼教務主任という地位がまつていた。だが、魯迅は、この地位にながく腰をおちつけていることを、ゆるされなかつた。やがて、広東にも、国・共分裂にともなう不穏な空気がながれはじめたのだ。その年の四月十五日には、広東省内の労働者・農民・知識人三千人あまりが、「赤狩り」の血祭りにあげられた。危険は、魯迅の身にもせまつた。おなじ年の十月、魯迅は、許広平をともなつて、広東をにげだし、香港をへて、上海の租界にもぐりこんだ。魯迅は、この安全地帯に身をおきながら、一九三六年、五十六歳でこの世をさるまで、エッセイによる社会諷刺を中心とする、さかんな文筆活動をつづけたのである。一九二七年十月八日、魯迅と許広平は、上海景雲里二十三号に住まいをさだめ、いよいよ同棲をはじめた。一九二九年九月二十七日、許広平は男の子をうんだ。魯迅のひと粒種——海嬰である。なお、魯迅には、許広平のほかに、二十六歳のときに母の希望で結婚した、「正式」の夫人があつた。だが、魯迅は、この人と正式の夫婦関係をむすぶことをこばみ、一生別居をつづけた、という。もつとも、ある時期には同居した、という噂もある。ともあれ、離婚はしなかつた。——魯迅と許広平との往復書簡は、のち、「両地書」[24]と銘うつて出版された。その内訳は、

「序言」	上海	一九三二年十二月十六日　魯迅
「第一集」	北京	一九二五年三月から七月まで
「第二集」	廈門——広州	一九二六年九月から二七年一月まで
「第三集」	北平——上海	一九二九年五月から六月まで

「第三集」は、ふたりの結婚ののち、北京にいた母親の病気見舞いにでかけていた魯迅と、姙娠中のため、上海にのこつていた許広平とのあいだに、とりかわされたものである。

「奔月」は、いわば、一種の寓話の手法による、散文体の抒情詩である。魯迅は、そこに、みずからの愛情の真実の姿を、ゆたかな感傷のうちに、あざやかにえがきだした。この作家にこのような作品のあることを、意外にかんじる向きも、あるかもしれない。だが、魯迅の文芸を、全体として正確にうけとるためには、このような作品をきりすてることは、ゆるされないのである。

註

1　一九一八年五月、雑誌「新青年」第四巻第五号に発表。のち短篇小説集「吶喊」（一九二三年八月　北新書局）におさめられた。

2　一九二一年十二月、新聞「晨報副刊」に連載。「吶喊」所収。

3　「華蓋集続編」（一九二七年七月　北新書局）「無花的薔薇之二」

4　「両地書」「第二集」十一月二十八日づけ。

5　「両地書」「第二集」十月二十日づけ。

6　エッセイ中心の雑誌。一九二四年十一月、北新書局から発刊。

7　「華蓋集続編的続編」（「華蓋集続編」所収）「廈門通信（二）」

8　「両地書」「第二集」十二月三日づけ。

9　「両地書」「第二集」九月十四日づけ。

10　「両地書」「第二集」九月十四日づけ。

11　「両地書」「第二集」九月三十日づけ。

12　文芸団体。一九二五年、魯迅らを中心に、北京で結成、雑誌「莽原」を発行。

13　一九二八年九月、未名社から「未名新集」の一冊として出版。

14　「故事新編」「序言」

15・16　「華蓋集続編的続編」「所謂『思想界先駆者』魯迅啓事」、「両地書」「第二集」十一月二十日づけほか。

17　「両地書」「第二集」一月十一日づけ。

18　「両地書」「第二集」九月二十六日づけほか。

嫦娥はなぜ月へにげたか

嫦娥はなぜ月へにげたか

19 「両地書」「第二集」九月三十日づけ。
20 「両地書」「第二集」九月十八日づけほか。
21 「両地書」「第二集」九月二十三日づけほか。
22 「両地書」「第二集」十二月二十七日づけ。
23 「両地書」「第二集」十二月二十七日づけ。
24 一九三三年四月、青光書局から出版。